

雲仙市文化財調査報告書 第13集

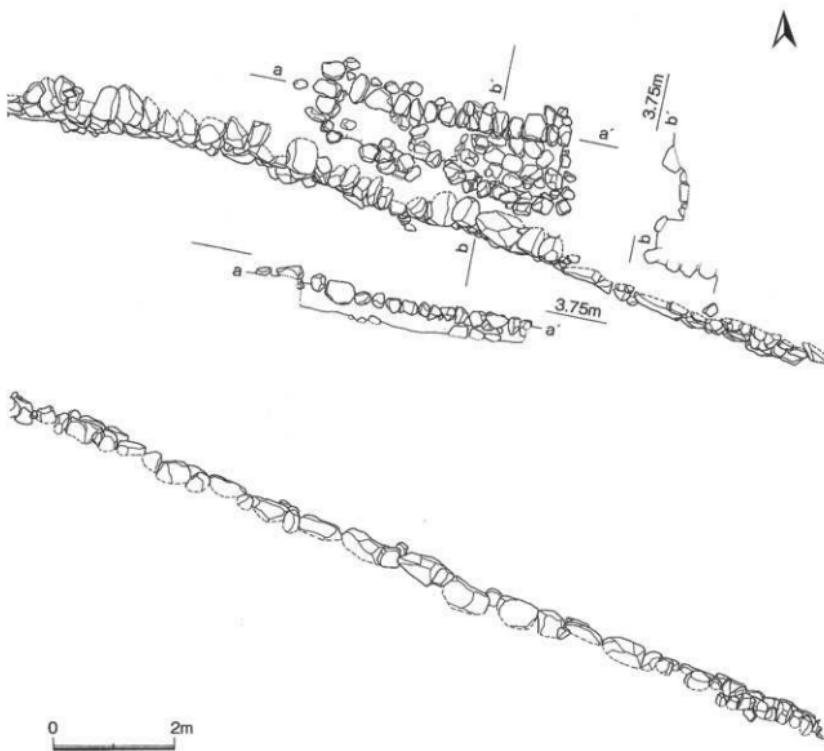
Kuji  
**小路遺跡**

Koujiro Kuji  
—神代小路地区街なみ環境整備事業に伴う発掘調査報告—

2014

長崎県雲仙市教育委員会





第8図 1区階段状遺構検出状況（1/60）

#### -1区階段状遺構検出状況一（第8図）

1区水路（SD-1）北側では、人頭大ほどの自然石が東西方向に直線的に並べられた状況で検出された。石列の全長は約4.3mである。石列の石積みを確認する為に、石列前にトレンチを入れて調査を行った。結果、石列は1段積みで、その前方には石列の下部にレベルを合わせて石が敷かれている状況を確認できた。石列前方に敷かれた石は、幅約15cmの自然石である。石列下部のレベルを基底として、水路（SD-1）側に下がる。今回検出された石列と敷石は、水路（SD-1）に伴う階段状の遺構であった可能性が高く、当時は、地表面から水路へと下りる為に利用されていたと考えられる。階段状遺構の覆土からは江戸期末～明治初頭の瓦質土器や染付磁器などが出土した。その為、今回検出された階段状遺構は、少なくとも明治初頭までは、利用されていた可能性が高いと考えられる。

### - 1区階段状遺構出土遺物一（第9図）

階段状遺構内からは、瓦質土器や染付磁器などが出土した。

1は瓦質土器の皿である。底部はやや平底を呈し、底部から口縁部までゆるやかに立ち上がる。器壁は全体的に厚い。

2は染付磁器の蓋である。つまみ上部は釉剥ぎである。外面つまみ部分には二重の圓線がめぐり、胴部は型紙摺り技法により区画文（唐草文）が、その中には文字などの文様が描かれている。内面の口縁部には環珞文が描かれている。明治初頭のものである。

3は染付磁器の小皿である。高台は低く、高台脇から口縁部までゆるやかに立ち上がる。高台疊付は釉剥ぎが施され、内面見込みには蛇目釉剥ぎが施される。内面口縁部には一重の圓線がめぐり、胴部には草文が描かれている。見込みには一重の圓線がめぐり、その中央には草文が描かれている。

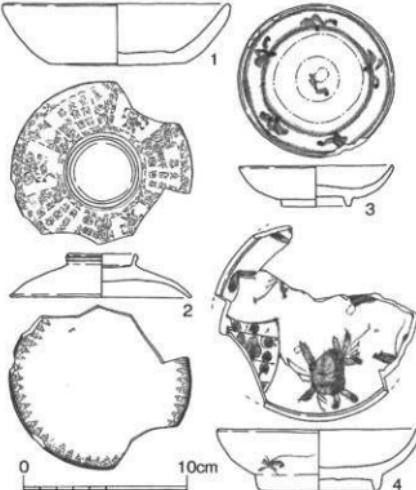
4は染付磁器の皿である。高台はやや高く、蛇目凸形高台である。高台脇から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。器壁は底部が厚く口縁部にかけて薄くなる。内面見込みには三足付ハマの支え跡がみられる。外面胴部には蝶文が描かれ、内面口縁部に一重の圓線がめぐり、胴部から見込み中央にかけて蝶文・蟹文が描かれている。蛇目凸形高台の釉剥ぎ部分には砂目痕が付着している。

### - 3区土坑群（SK-1～SK7）検出状況一（第10図）

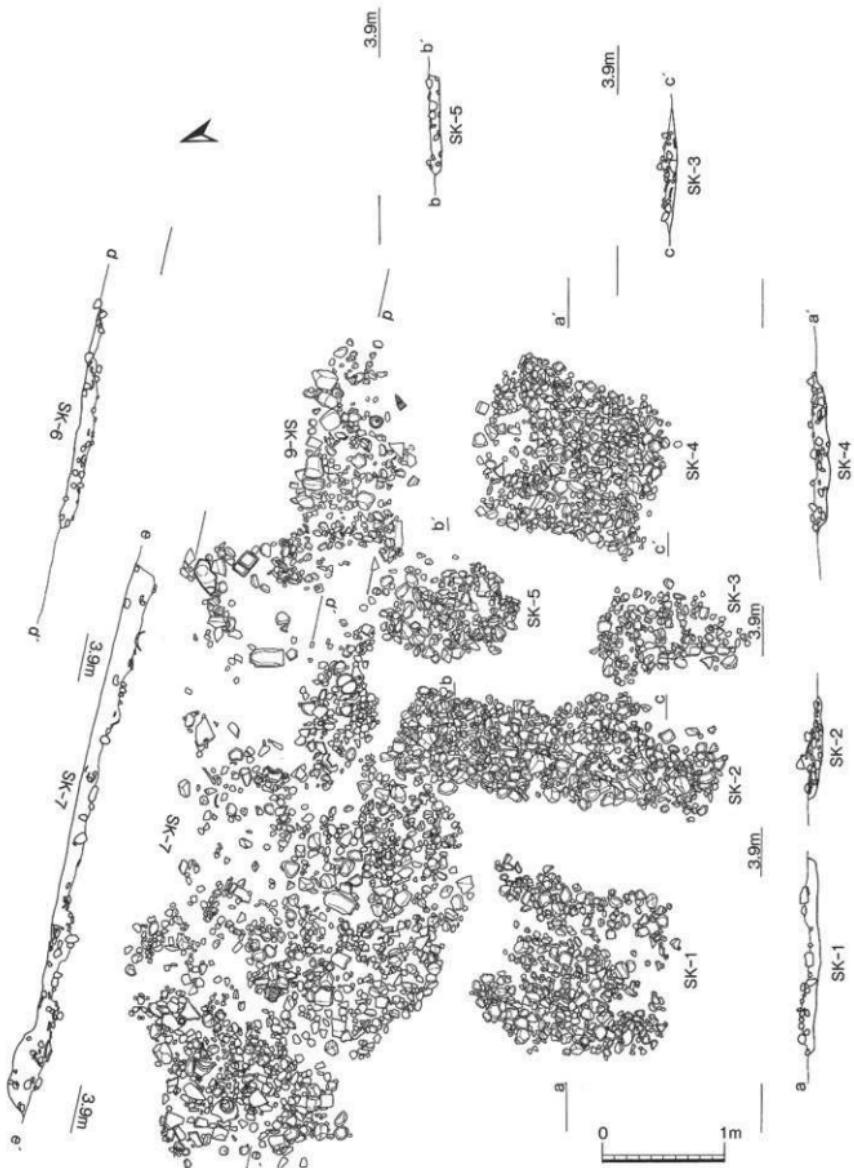
3区SD-1北側からは、江戸時代の土坑群（SK-1～SK-7）が検出された。土坑群は、長さ約9m、幅約6mの範囲内に7基確認された。SK-1～SK5までは、東西方向に一列に並ぶように検出され、その北側からは、SK-6とSK-7が並列して検出されている。

SK-1は、長軸約1.6m、短軸約1.4mで、形状はやや長方形を呈す。深さ約12cmを測り、断面形状は逆台形を呈す。SK-2は、長軸約2.8m、短軸約1mで、形状は長方形を呈す。深さ約14cmを測り、断面形状はレンズ状を呈す。SK-3は、長軸約1.2m、短軸約0.8mで、形状は楕円形を呈す。深さ約10cmを測り、断面形状はレンズ状を呈す。SK-4は、長軸約1.5m、短軸約1.2mで、形状はやや長方形を呈す。深さ約8cmを測り、断面形状はレンズ状を呈す。SK-5は、長軸約1.2m、短軸約0.8mで、形状は楕円形を呈す。深さ約10cm、断面形状は逆台形を呈す。SK-6は、長軸約2.8m、短軸約1.6mで、形状は不定形を呈す。深さ約4cmを測り、断面形状はレンズ状を呈す。SK-7は、長軸4.6m、短軸約2.6mで形状は不定形を呈す。深さ約14cmで、断面形状はレンズ状を呈す。また、土坑上面は後世の搅乱により削平を受けている為、土坑のプランや深さなどは明確ではない。

土坑群は、一ヶ所に集中して検出されており、土坑内からは、拳大の礫と陶器器や瓦、土師質土器などが多く出土した。遺物は、波佐見焼などの碗や皿、鉢、火鉢などの日用品が多く、そのほとんどは一部欠損しているものが大半であることから、破損するなどして不要となったものと考えられる。



第9図 1区階段状遺構出土遺物(瓦質土器・磁器)(1/3)



第10図 3区土坑群（SK-1～SK-7）検出状況（1/40）

検出された遺構と遺物

- 3 区土坑群 (SK-1～SK-7) 出土遺物 - (第11図～第20図)

-SK-1出土遺物 - (第11図)

5は染付磁器の碗である。高台は低く、高台疊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面高台に三重の圈線、腰部に一重の圈線がめぐり、胴部に文字文が描かれている。内面見込みに二重の圈線がめぐり、中央に文字文、口縁部に四方櫻文が描かれている。

6は染付磁器の蓋である。つまみ疊付は釉剥ぎである。つまみから口縁部にかけてゆるやかに内湾し、つまみはやや外反する。外面つまみに二重の圈線がめぐり、笹文が描かれている。つまみ内には一重の圈線がめぐり、中央に文字文が描かれている。内面口縁部には菱繋文が描かれている。

7は磁器の紅皿である。壓押し成形で、高台は低く、高台脇から口縁部にかけて内湾する。口縁部は輪花で、全体的に買入が見られる。高台は貼り付けである。

8は磁器の仏飯器である。底部は削り出しで、坏部分は浅い、脚部から底部にかけて無釉である。

9は染付磁器の皿である。高台は低く、高台疊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけて内湾する。高台には焼成時に付着した砂目痕が残る。見込みには蛇ノ目釉剥が施され、砂目痕が残る。内面には、見込みに二重の圈線がめぐり、胴部に二重斜格子文が描かれている。18世紀中葉～18世紀後半の波佐見焼である。

10は青磁の盤口径仏花瓶である。頭部に桃の飾りが2つ付いている。外面と内面口縁部から頭部中位まで施釉される。波佐見青磁と思われる。

11は青磁の大鉢である。高台疊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけて内湾する。器壁は高台部分が最も厚く口縁部にかけて薄くなる。口縁部は輪花である。見込みには、菊文が彫られている。18世紀前半に波佐見の長田山窯で生産された青磁と思われる。

-SK-2出土遺物 - (第11図)

12は土師皿である。底部は回転糸切離しによるもの。底部内面と胴部の接続部分は若干盛り上がる。器壁は全体的に薄い。

13は染付磁器の碗である。高台は低く、疊付は釉剥ぎである。高台内にあたる疊付付近に蛇目跡が残る。高台脇から口縁部にかけてやや内湾する。外面胴部には矢羽根文を描き、外外面に鉄分の付着がみられる。

14は染付磁器の碗である。高台は低く、疊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面には梅文・竹文が描かれている。

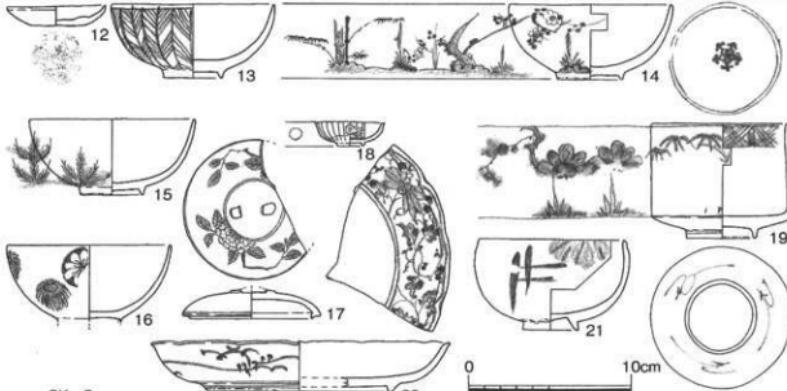
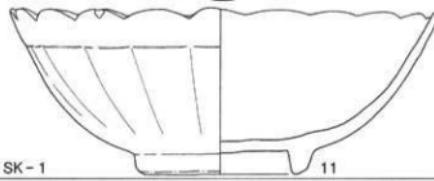
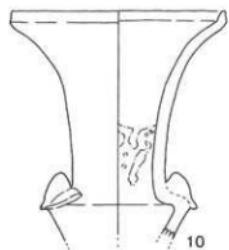
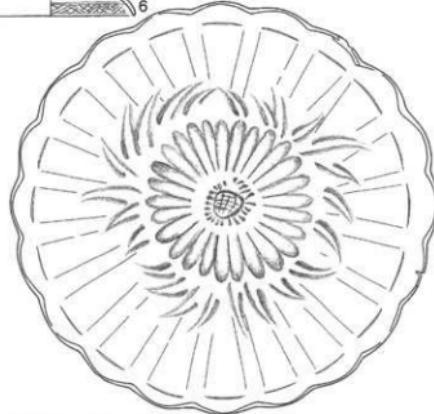
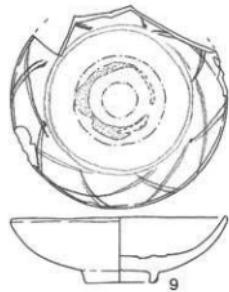
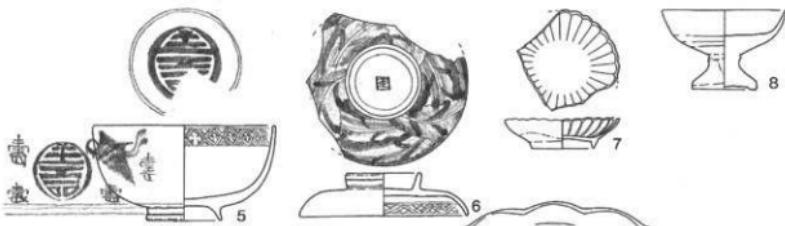
15は染付磁器の碗である。高台は低く、疊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。内面にはサビの付着がみられ、外面には松文が描かれている。

16は染付磁器の碗である。高台は欠損しており全様は不明である。高台脇から口縁部にかけて内湾する。胴部外面には花文が描かれている。

17は染付磁器の蓋である。口縁部は釉剥ぎで、焼成時に付着したと思われる砂がみられる。口縁部から取手下位までは内湾し、全体的に買入がみられる。外面口縁部には一重の圈線がめぐり紫陽花文が描かれ、取手の周囲には二重の圈線がめぐる。

18は磁器の紅皿である。壓押し成形で、高台は貼り付けである。高台は低く、高台脇から口縁部にかけてゆるやかに内湾する。外面には花文が陽刻されている。内面及び外外面胴部中位までは施釉されているが、外外面下位から高台は露胎である。

19は染付磁器の筒型碗である。高台は低く、疊付は釉剥ぎである。高台脇からやや斜めに立ち上が



第11図 3区土坑 (SK-1・2) 出土遺物 (土師器・磁器) (1/3)

り、腰部から口縁部までやや垂直に立ち上がる。外面高台には二重の圈線が巡り、胴部には草花文、内面口縁部には四方擗文が、見込みには二重圓線が描かれ、その中央にはコンニャク印判で五弁花文を描く。

20は染付磁器の皿である。高台は低く、二重の圈線がめぐる。高台脇から胴部上位にかけて内湾し、口縁部はやや外反する。外面胴部下位には一重の圈線がめぐり、唐草文が描かれている。口縁部は輪花と思われる。内面には牡丹唐草文が描かれており二重の圈線がめぐる。

21は京焼鳳陶器の碗である。四角く削り出された高台から胴部は斜めに開き、口縁部まで内湾しながら立ち上がる。高台は釉薬を施さず、高台内には中央に円形の浅い削り込みが見られる。外面には文字の「井」と花文が描かれている。

#### -SK-3出土遺物- (第12図)

22は土師皿である。底部は平坦で口縁部に向かいやや外反する。口縁部の歪みが激しい。外面に煤の付着がみられる。

23は土師器の灯明皿である。口縁部に2度の打ち欠きあり。底部からゆるやかに上がり、口縁端部は内湾している。器壁は全体的に薄い。外面に煤の付着がみられる。

24は染付磁器の小碗である。高台は低く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部まで内湾する。外面には櫻文などが描かれている。器壁は見込み部分が最も厚く口縁部にかけて薄くなる。

25は染付磁器の小碗である。高台は低く、高台脇から口縁部にかけてやや垂直に立ち上がる。豊付は釉剥ぎである。外面には梅文が描かれている。

26は染付磁器の皿である。高台は低く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部まで内湾する。内面見込みは蛇目釉剥ぎである。外面胴部には折松葉文が描かれ、内面胴部には菊唐草文が、見込みにはコンニャク印判で「五弁花文」が描かれる。18世紀中葉から18世紀後半の波佐見焼である。

27は染付磁器の皿である。高台は低く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部まで内湾し、見込みは蛇目釉剥ぎである。高台骨付には焼成時に付着した砂目痕がみられる。内面胴部には菊唐草文が描かれ、見込みにはコンニャク印判で「五弁花文」が描かれる。18世紀中葉から18世紀後半の波佐見焼である。

28は青磁の盤口形花瓶底部である。豊付は釉剥ぎを施し、高台脇から豊付まで裾広がりである。高台内面には焼成時に付着したと思われる砂目痕がみられる。外面には二重圓線と唐草文が描かれ。

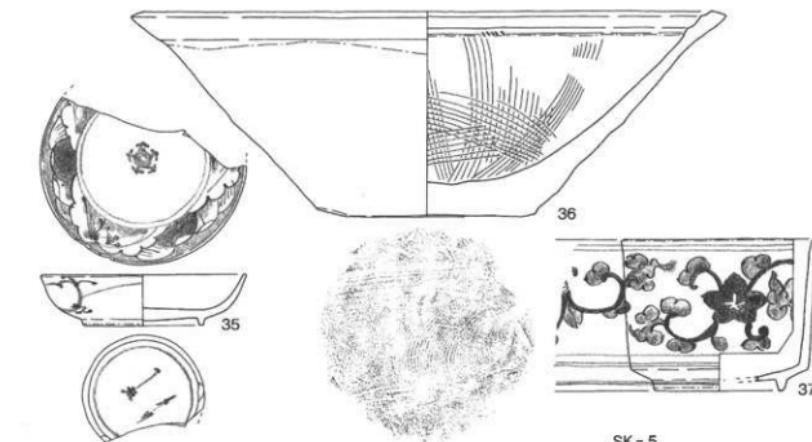
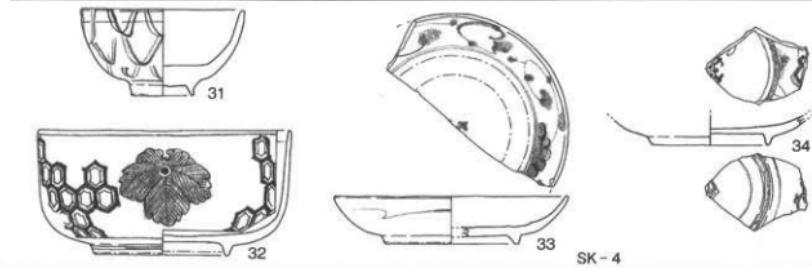
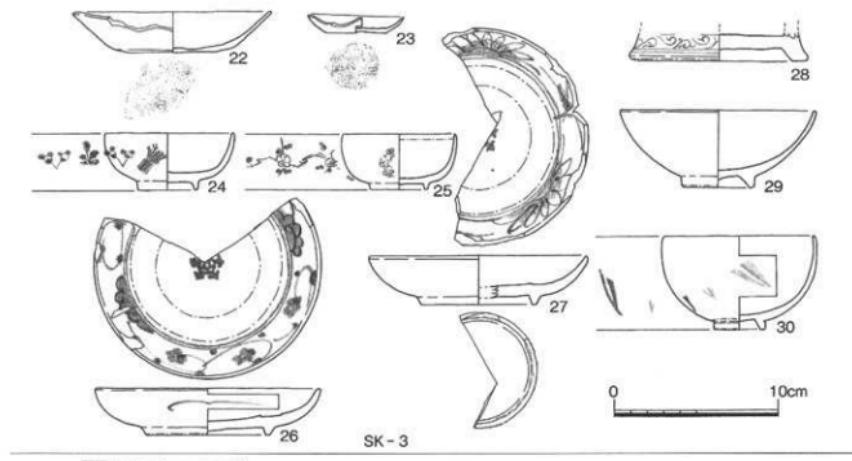
29は陶器の碗である。高台は低く、削り出しである。高台脇から口縁部までゆるやかに内湾する。器壁は底部が最も厚く、口縁部にかけて薄くなる。全体的に貫入が見られる。

30は京焼鳳陶器の碗である。高台は低く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけて内湾する。全体的に貫入がみられる。外面には葉文が描かれている。

#### -SK-4出土遺物- (第12図)

31は染付磁器の碗である。高台は低く、豊付は釉剥ぎで、焼成時に付着した砂目痕が見られる。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに内湾する。外面には二重網目文が描かれている。18世紀中葉から18世紀後半の波佐見焼である。

32は染付磁器の鉢である。高台は低く、釉剥ぎである。高台脇から腰部にかけて内湾し、腰部から口縁部にかけてやや垂直に立ち上がる。外面高台には二重圓線がめぐり、胴部には破れ亀甲文と桐文が描かれている。18世紀後半のものか。



第12図 3区土坑（SK-3・4・5）出土遺物（土師器・磁器・陶器）（1/3）

33は染付磁器の皿である。高台は低く、高台疊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけて内湾する。高台内部には焼成時に付着した砂目痕が残る。外面には胴部に折枝文が描かれている。内面には、胴部に二重の囲線がめぐり、菊唐草文が見込みには、コンニャク印版による五弁花文が描かれている。見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施される。18世紀中葉から18世紀後半の波佐見焼である。

34は染付磁器の皿である。高台は台形を呈し、端部がやや内側に入る。高台疊付は露胎しており砂目跡が残る。内面には草花文、見込みには一重圓線とコンニャク五弁花文を描く。外面には一重圓と唐草文、高台には二重圓線、高台見込みには一重圓線と渦福が描かれている。

#### -SK-5出土遺物-（第12図）

35は染付磁器の皿である。高台は低く、高台疊付は釉剥ぎである。高台には焼成時に付着したと思われる砂目痕がみられる。高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面には唐草文が描かれている。内面には、胴部に一重の圓線がめぐり、草花文が、見込みにはコンニャク印版による五弁花文が描かれている。高台内には一重の圓線がめぐり、中央に「大明年製くすし」が描かれている。18世紀中葉から18世紀後半の波佐見焼である。

36は陶器の擂鉢である。底部には回転糸切り痕がみられ、底部から口縁部にかけて立ち上がる。器壁は底部がもっとも厚く、口縁部にかけて薄くなる。内外面ともに鉄軸を施す。内面底部から胴部上位にかけて擂目が残る。擂引きは一単位ごとの間隔が空き先端は引きっぱなしである。擂目は底部中央を中心に放射線状に引いた後、方形に引いている。

37は、染付磁器の鉢である。本来は蓋が付くものと思われる。高台は低く、疊付は釉剥ぎである。疊付には焼成時に付着した砂目痕がみられる。高台脇から腰部までやや斜めに立ち上がり、腰部から口縁部下までやや直線に立ち上がり、口縁部は外反する。内面口縁部は釉剥ぎを行う。外面高台と腰部、口縁部に二重圓線がめぐる。また、胴部下位には一重圓線がめぐり、胴部には花唐草文が描かれている。18世紀以降のものか。

#### -SK-6出土遺物-（第13図・第14図・第15図）

38は土師皿である。底部は回転糸切離しによる。底部から胴部上位までやや斜めに立ち上がり、口縁部は内湾する。底部内面は、ゆるやかに凹凸がある。口縁部に煤の付着がみられる。

39は土師皿である。底部から口縁部までやや斜めに立ち上がり、口縁部端部はわずかに外反する。底部は糸切離しによる。底部内面はナデ調整によりゆるやかな凹凸がある。器壁は全体的に薄い。

40は瓦質土器の火打箱である。中に仕切りがついており、一方の区画に火口を入れ、他方には火打ち石・火打金・付け木などを入れていたと考えられる。器壁は全体的に厚く、器壁の剥離がみられる。

41は土師質土器の炉形土器（暖防具）である。上面を開口する立方体の土器である。開口部の周囲に鈎をめぐらす。4辺の内、対になる2辺の鈎には約9cmの溝があり、溝の両端に1ヶ所ずつ孔を穿つ。器壁は厚く板作り成形である。粘土板の接合部はナデ調整が外面にはハケメ調整が施される。

42は染付磁器の碗である。高台は低く、疊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけて内湾し、器壁は全体的に厚い。口縁部内面は無釉である。外面は高台に二重、腰部に一重の圓線がめぐり、胴部には亀甲文、円の中に牡丹文・草文・水仙文が描かれている。

43は絵磁器の碗である。高台は低く、疊付きは釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけて内湾する。内面口縁部は釉剥ぎである。本来は蓋が付くものであろう。外面高台には一重の圓線が描かれ、腰部には蓮弁文が、胴部には方形区画文の中に花文などが描かれている。18世紀後半のものか。

44は染付磁器の輪花の大皿である。高台疊付は釉剥ぎであり、高台内には一重の圈線がめぐり、その中央には足付きハマ溶着痕と「大明成化年製」の文字が描かれている。外面高台には、二重圈線がめぐり、胴部には山水東屋文が描かれている。口縁部は輪花である。内面は胴部に岩文・草文、見込みには山文・松文・三頭の馬文が描かれている。

45は青磁の小碗である。高台疊付は釉剥ぎで高台は低く、高台脇から口縁部まで内湾する。

46は青磁の小碗である。高台疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。

47は青磁の色絵鉢である。高台は低く、疊付は釉剥ぎである。器壁は全体的に厚い。高台脇から胴部上位にかけてやや内湾し、口縁部は外反する。口縁部が八角形の鉢である。外面には雲文・椿文が、内面には椿文が描かれている。有田焼である。

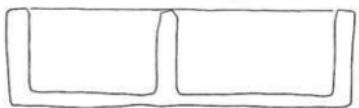
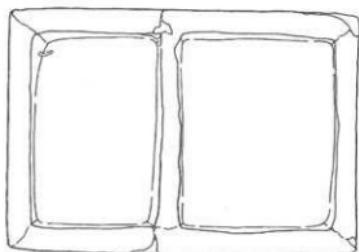
48は青磁の色絵鉢である。口縁部が八角形の鉢。高台は低く、疊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部下まで内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。高台内面には焼成時の足付ハマ痕と砂目痕がみられる。内外面に椿文・雲文が描かれている。内面見込み部分に描かれている雲文には傷かくしの痕跡がみられる。有田焼である。

49は青磁の色絵鉢である。高台は低く、疊付は釉剥ぎである。高台脇から内湾しながら立ち上がり口縁部にかけて外反する。内外面に椿文・雲文が描かれている。口縁部が八角形の鉢で器壁は全体的に厚い。有田焼で、47、48、49ともにセットものである。

50は陶器の鉢である。高台は低く、削り出しである。高台脇から口縁部下まで内湾し、口縁部は玉縁状である。高台疊付には精砂粒の溶着痕がみられ、内面見込みには焼成時に付着した砂目痕がみられる。

38

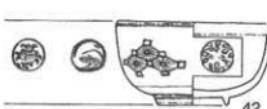
39



40



41



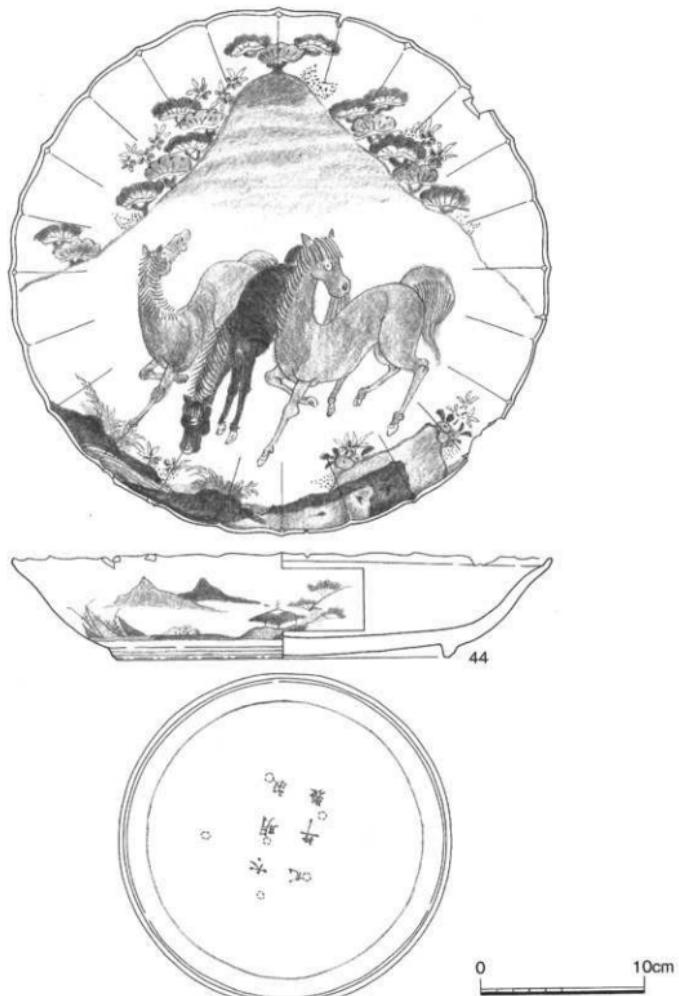
0

15cm

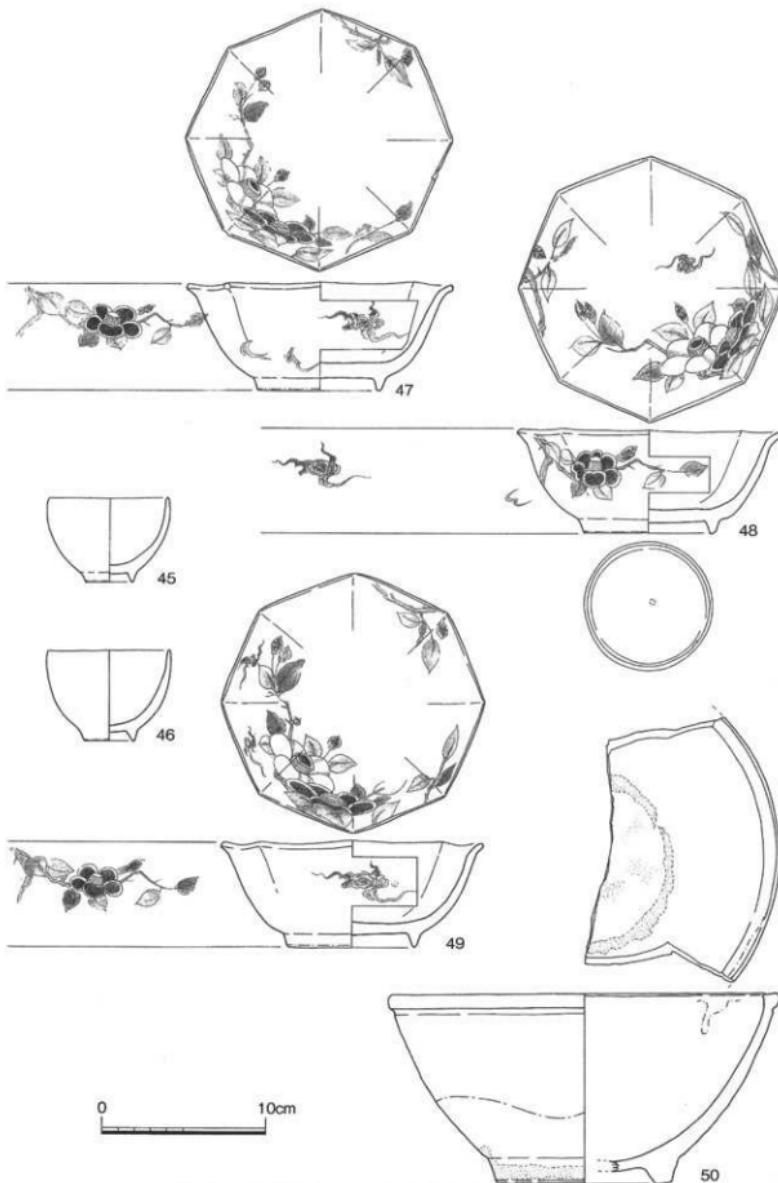
0

10cm

第13図 3区土坑（SK-6）出土遺物（土師器・土師質土器・磁器）（1/3・1/6）



第14図 3区土坑（SK-6）出土遺物（磁器）（1/3）



第15図 3区土坑（SK-6）出土遺物（磁器・陶器）（1/3）

-SK-7出土遺物一（第16図・第17図・第18図・第19図・第20図）

51は土師質土器の鍋である。底部は一部欠損する。底部から胴部上位にかけてやや斜めに立ち上がり、口縁部との接合部で屈曲し、口縁部はやや内湾する。外面胴部底部から胴部には斜位のハケメ、口縁部は斜位のハケメとナデ、指頭圧痕が、内面口縁部には指頭圧痕がみられる。

52は土師質土器の鍋である。底部欠損し、胴部から口縁部にかけて残存する。胴部は斜めに立ち上がり、口縁部との接合部で屈曲し、口縁部はやや外反する。外面胴部は斜位のハケメ、口縁部は継位のハケメを施し、屈曲部分には指頭圧痕がみられる。内面は全体的にナデ、屈曲部分に指頭圧痕がみられる。外面の一部には煤が付着している。

53は土師質土器の鍋である。底部から胴部上位にかけてやや斜めに立ち上がり、胴部上位と口縁部との接合面で屈曲し、口縁部はやや外反する。底部から口縁部下の屈曲部分は横位のハケメ、口縁部は斜位のハケメを施し、指頭圧痕がみられる。内面は全体的にナデ、底部には煤の付着がみられる。

54は土師皿である。底部は回転糸切り後、静止ナデもしくは磨耗により、一部回転糸切り離し痕が消されている。内面及び口縁部外面に煤の付着がみられ、灯明皿として扱われた可能性が高い。器壁は全体的に非常に薄い。

55は土師皿である。底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。底部には板状圧痕が残り、内面底部には鶴と思われる鳥の文様の型押しが施される。内面、外面の口縁部には煤の付着が見られる。同様の遺物は、鍋島邸の発掘調査でも出土している（辻田・竹田2013）。鍋島邸で出土したものは建物の地鎮祭に用いたものであり、おそらく、今回の調査で出土した遺物も、建物などを建てる際の地鎮祭に使用されたものであると考えられる。

56土師皿の坏である。底部は回転糸切りで、底部から口縁部までやや斜めに立ち上がる。内外面ともにナデである。

57は土師質土器の である。底部形態は円形を呈し、底部から口縁部までやや垂直に立ち上がる。腰部にはケズリを施し、外面内面ともにナデである。

58は土師質土器の焼塩壺である。身の成形技法は、芯の回りに粘土板を巻き詰めて底とする技法（板作り成形）である。器壁は全体的に厚く、外面には煤の付着がみられる。焼塩壺は、精製塩を生産し、輸送するのに用いられたものである。18世紀代ものである。

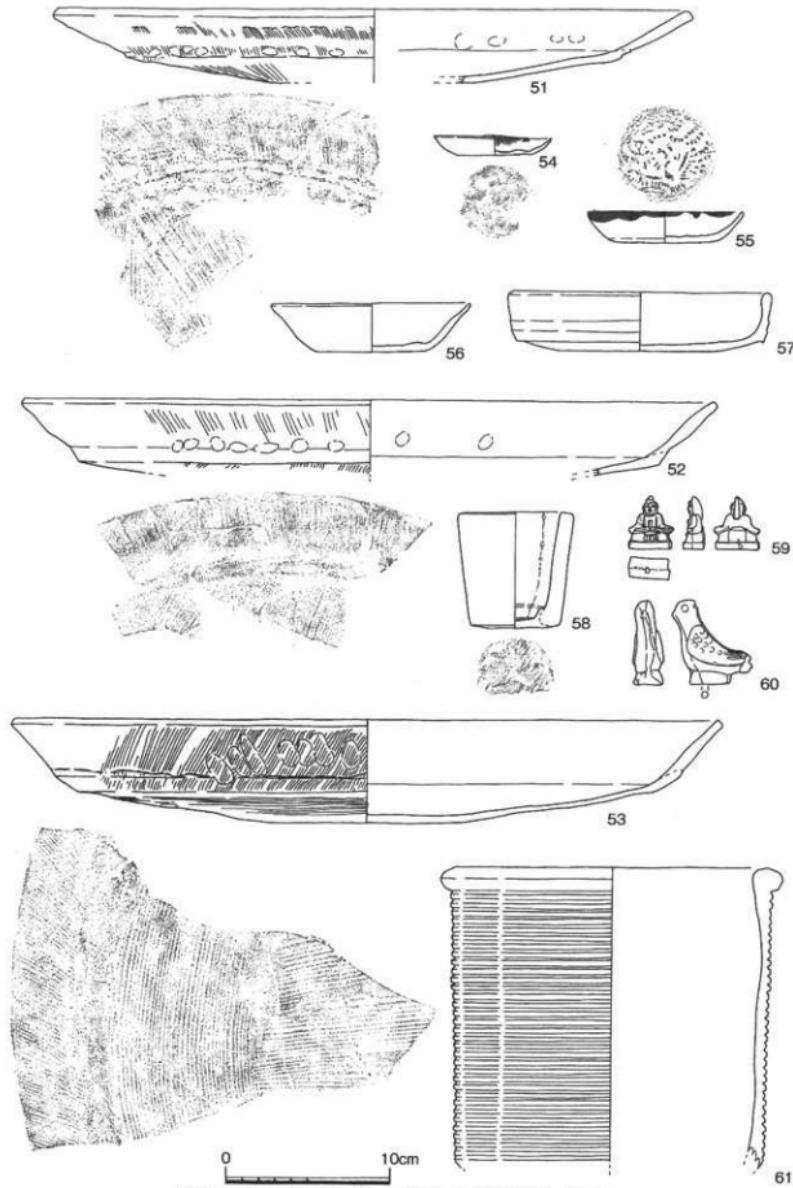
59は土製人形の天神様である。型押し成形で、底部中央には穿孔が1つみられる。18世紀前半のものか。

60は土製人形の鳩である。型押し成形で、底部には径4mmほどの穿孔がみられる。全体的に磨耗しており、目や羽の模様は消えかかっている。胎土にごく少量あるが白雲母がみられる。

61は土師質土器である。底部は欠損しており、形状は筒型を呈す。外面胴部には33本の沈線がめぐる。粘土帯を積み上げて作られており、内面胴部には粘土帯が重なり厚くなつたと痕跡がみられる。内外面共にナデ調整が施される。植木鉢か。

62は軟質瓦質土器の火鉢である。底部は欠損しており、全容は把握できない。胴部下位から口縁部下にかけてやや垂直に立ち上がる。口縁部は外反し、口縁部から口唇部にかけてやや斜めに立ち上がる。内外面ともに口縁部はミガキで胴部内面は斜位のハケが施される。胴部内面には指頭圧痕がみられる。胴部外面は型押し成形で、草花文、満文が陽刻されている。

63は軟質瓦質土器の火鉢である。脚は欠損しているが、本来は底部の下に脚が付くものである。底部から腰部までやや斜めに立ち上がり、腰部から口縁部下までやや垂直に立ち上がる。口縁部は外反する。外面胴部中位から口縁部下までは、模様が型押しされ、口縁部下には一条の沈線がめぐる。内



第16図 3区土坑 (SK-7) 出土遺物 (土師質土器) (1 / 3)

検出された遺構と遺物

25

面胴部中位から上位にかけて横位のハケを行い、指頭圧痕がみられる。

64は染付磁器の広東碗である。高台は高く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけてやや外反しながら立ち上がる。外面には高台脇に一重の圓線がめぐり、胴部には草文が描かれている。内面口縁部には二重の圓線がめぐり、その中央には火炎宝珠文が描かれている。18世紀末～19世紀前半の波佐見焼である。

65は染付磁器の広東碗である。高台は高く、脣付は釉剥ぎであるが焼成時に付着した砂目痕がみられる。高台脇から口縁部にかけてやや斜めに立ち上がる。外面は高台脇に一重の圓線がめぐり、胴部には蔓草文が描かれ、口縁部には一重の圓線がめぐる。内面は口縁部に二重の圓線、見込みには一重の圓線がめぐり、その中央には寿字が描かれている。1780年代～1830年代の波佐見焼である。

66は染付磁器の広東碗である。高台は高く、豊付は釉剥ぎで、焼成時に付着した砂目痕がみられる。高台脇から口縁部にかけてやや斜めに立ち上がる。外面高台脇に一重圓線がめぐり、胴部には草花文と蝶文が描かれている。内面口縁部には二重圓線めぐり、見込みには一重圓線がめぐる。その中央には蝶文が描かれている。1780年代～1810年代の波佐見焼である。

67は染付磁器の碗である。高台は低く、高台脇から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。高台豊付は釉剥ぎである。内面は、口縁部と見込みにそれぞれ二重の圓線がめぐり、見込み中央に源氏香文が描かれている。外面には、三重の圓線がめぐり、草文、放射状文が描かれている。

68は染付磁器の碗である。高台は低く、断面は三角形を呈す。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。高台豊付は釉剥ぎである。内面見込みには二重の圓線がめぐり、中央に源氏香文が描かれている。また、三足ハマ痕が残る。外面には、口縁部、腰部、高台、にそれぞれ一重の圓線、高台脇に三重の圓線がめぐり、胴部に草文、放射状文が描かれている。

69は染付磁器の碗である。高台は低く、高台脇から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。高台豊付は釉剥ぎである。内面は、口縁部に二重の圓線、見込みに一重の圓線がめぐり、見込み中央に源氏香文が描かれている。見込みには砂目痕が残る。外面には、口縁部、腰部、にそれぞれ一重の圓線、高台脇、高台にそれぞれ二重の圓線がめぐり、胴部に草文、放射状文が描かれている。

70は染付磁器の碗である。高台は低く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。外面胴部には松竹梅文が描かれている。18世紀中葉頃の波佐見焼か。

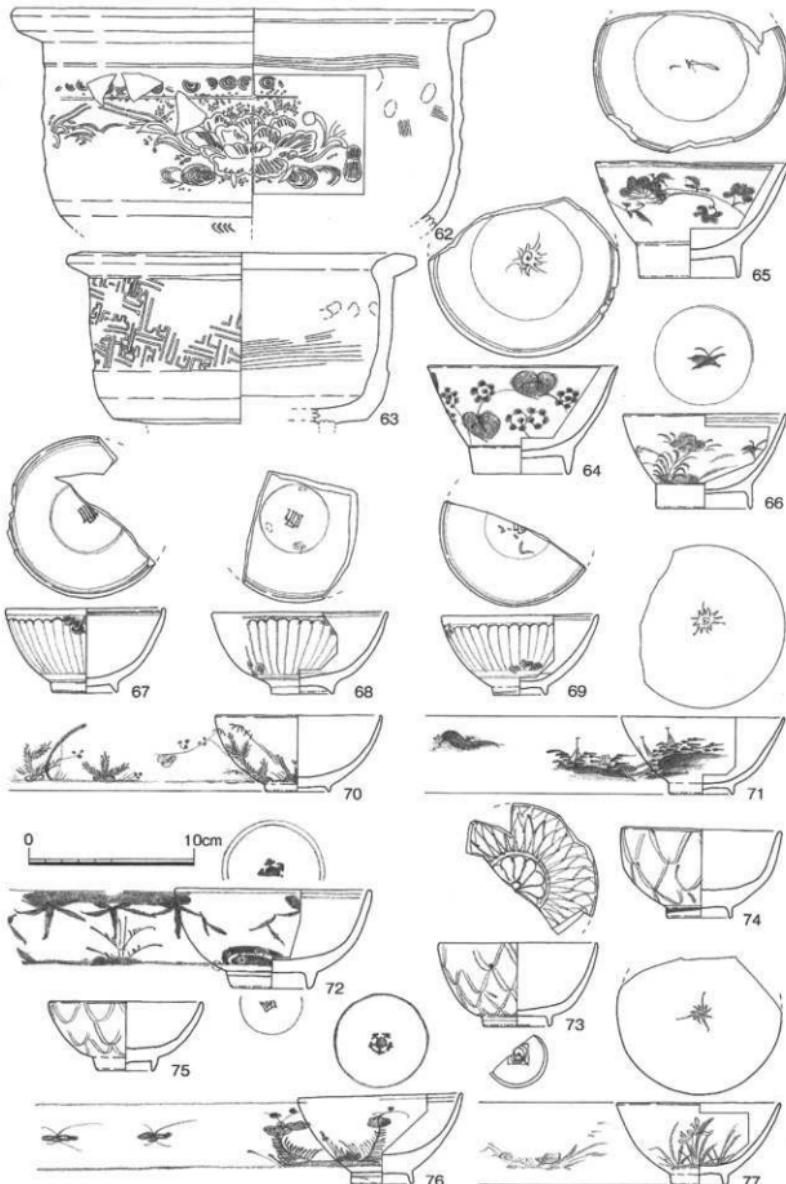
71は磁器の碗である。高台は低く、脣付は釉剥ぎである。見込みには火炎宝珠文を、外面には山水文を描く。器壁は薄い。高火力燃焼により、釉薬が灰褐色または赤褐色に変化した部分がみられる。

72は染付磁器の碗である。高台は低く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面高台は二重圓線がめぐり、高台内には一重圓線がめぐり、その中央には渦福文が描かれている。外面胴部には雪持ち笠文が描かれ、口縁部には一重圓線がめぐる。内面口縁部と見込みには二重圓線がめぐり見込み中央にはコンニャク印判で「五弁花文」が描かれている。18世紀後半の波佐見焼である。

73は染付磁器の碗である。高台は低く、高台脇からゆるやかに内湾しながら立ち上がる。高台豊付は釉剥ぎであり、高台には砂目痕が残る。外面には、高台に二重の圓線がめぐり、同部に二重網目文、高台内に一重角杵渦福文が描かれている。内面見込みには菊花文、胴部に一重網目文が描かれている。

74染付磁器の碗である。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。高台豊付は釉剥ぎであり、高台内に砂目痕が残る。外面は、三重の圓線がめぐり、二重網目文が描かれている。18世紀後半の波佐見焼である。

75染付磁器の碗である。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。口縁部は梢円形気味である。高台脣付は釉剥ぎである。外面は二重網目文が描かれている。18世紀後半の波佐見焼である。



第17図 3区土坑 (SK-7) 出土遺物 (瓦質土器・磁器) (1/3)

76は染付磁器の碗である。高台は低く、豊付きは釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がる。外面高台には二重圏線がめぐり、胴部には蝶文と草花文が、描かれており、口縁部には一重圏線がめぐる。内面口縁部には二重圏線がめぐり、見込みには一重圏線がめぐる。その中央にはコンニャク印判で五弁花文が描かれている。波佐見焼である。

77は染付磁器の碗である。高台は低く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がる。豊付以外は全て貫入が入る。外面には草花文、見込みには火炎宝珠文が描かれている。

78染付磁器の碗である。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。器壁は全体的に薄い。全面に施釉が施される。内外面ともに文字文が描かれている。

79は染付磁器の碗である。高台は低く、高台脇から腰部にかけて内湾し、腰部から口縁部にかけてやや垂直に立ち上がる。器壁は全体的に薄い。外面には円の中に格子文が描かれ環状にめぐり、内面見込みには昆虫文が描かれている。

80は染付磁器の碗である。高台は断面が四角形を呈し、豊付のみ露胎している。腰部が丸く張り、胴部半ばから口縁部に向かってやや垂直に立ち上がる。内外面には格子文が描かれている。19世紀前半の波佐見焼である。

81は染付磁器の碗である。高台は低く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけてやや垂直に立ち上がる。外面には草花文と鳥文が内面には雷文が描かれている。

82は染付磁器の碗である。高台は低く、豊付は釉剥である。高台脇から腰部までは内湾し、口縁部にかけてやや外反する。外面には、高台に二重の圏線、腰部に一重の圏線がめぐり、胴部には唐草文、草花文が描かれている。内面には、口縁部に雷文が描かれ一重の圏線がめぐる。見込みには二重の圏線がめぐり、中央には十字花文が描かれている。

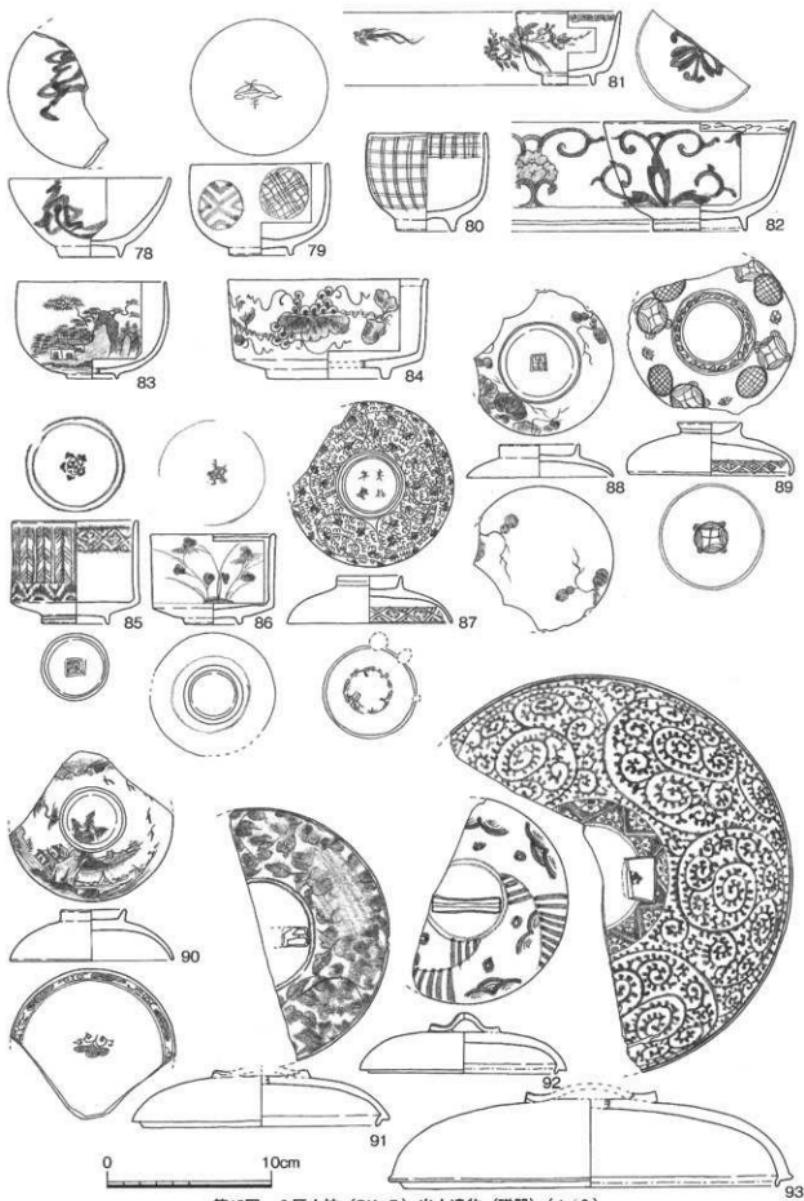
83は染付磁器の碗である。高台は低く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。内外面に砂の付着がみられる。器壁は全体的に薄く、外面には山水文が描かれている。

84は染付磁器の段重である。高台は低く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から腰部まではやや斜めに立ち上がり、腰部から口縁部にかけてやや直線的に立ち上がる。器壁は底部が厚く、口縁部にかけて薄くなる。口縁部内面は釉剥ぎである。外面には葡萄文が描かれ、焼成時の溶着痕がみられる。

85染付磁器の筒型碗である。高台は低く、豊付は釉剥ぎで焼成時に付着した砂目痕が見られる。高台脇から腰部まで斜めに立ち上がり、腰部から口縁部までやや垂直に立ち上がる。外面高台内には渦福が、高台には二重圏線がめぐり、胴部には矢羽根文が描かれている。内面口縁部には四方擗文を描き、見込みには二重圏線がめぐり、その中央にはコンニャク印判で五弁花文が描かれる。1740年代から1780年代の波佐見焼である。

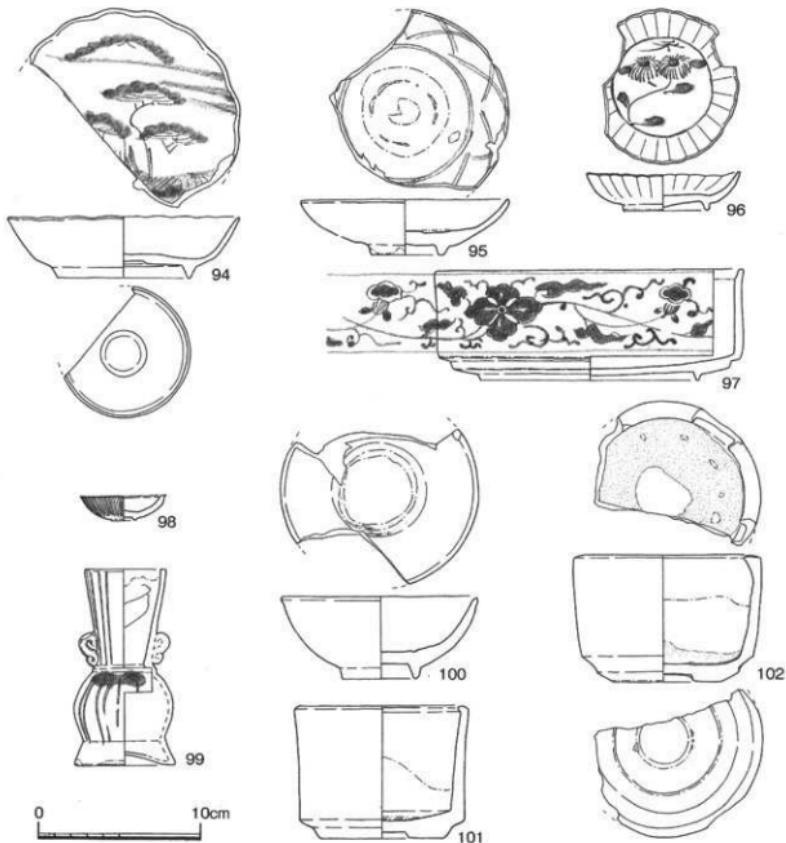
86染付磁器の筒型碗である。豊付は釉剥ぎで、腰部は張り出し、口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部でやや外側に広がる。器壁は底部が厚く口縁部にかけて薄くなる。外面には、高台脇と同部にそれぞれ一重の圏線がめぐり、草花文が描かれている。内面には口縁部と見込みに一重の圏線がめぐり、見込み中央にコンニャク印判で五弁花文が描かれている。18世紀後半の波佐見焼である。

87は染付磁器の蓋である。口縁部からつまみにかけて内湾しながら立ち上がる。外面つまみに二重圏線がめぐり、胴部に唐草文が描かれている。つまみ内には一重圏線がめぐり、中央に「成化年製」と描かれている。内面には、口縁部に四方擗文が、見込みに二重圏線がめぐり、中央には環状の竹松梅文が描かれる。



第18図 3区土坑（SK-7）出土遺物（磁器）（1／3）

検出された遺構と遺物



第19図 3区土坑(SK-7)出土遺物(磁器)(1/3)

88は染付磁器の蓋である。口縁部からつまみにかけてゆるやかに立ち上がる。つまみ内には文字文が描かれ、外面胴部と内面胴部には瓢箪文が描かれている。波佐見焼である。

89は染付磁器の蓋である。口縁部からつまみにかけてゆるやかに立ち上がる。口縁端部は内湾しながら下方に折れる。器壁はつまみの取り付け部分が最も厚く、口縁部にかけて薄くなる。つまみの疊付は釉剥ぎであり、砂目痕が残る。外面には、つまみを囲むように圈線と渦文を、胴部には丸文、七宝文が描かれている。内面には、口縁部に四方襟文、見込みに二重の圈線と七宝文が描かれている。

90は染付磁器の蓋である。口縁部からつまみまでゆるやかに内湾しながら立ち上がり、つまみは外反する。器壁はつまみ部分が最も厚く、口縁部にかけて薄くなる。外面には山水文、松文、つまみ内には岩文が描かれ、内面には唐草文花卉文が描かれている。

91は染付磁器の蓋である。口縁部は釉剥ぎである。口縁部からつまみまでゆるやかに内湾しながら

立ち上がる。外面には二重の圈線がめぐり、唐草文が描かれている。唐草文は一部かすれている。

92は染付磁器の蓋である。口縁部は釉剥ぎであり、砥石が付着している。口縁部からつまみまでゆるやかに内湾しながら立ち上がる。外面には、二重の圈線がめぐり、波文が描かれている。

93染付磁器の蓋である。口縁部は釉剥ぎであり、アルミニナ砂が塗布されている。口縁部から頭頂部までゆるやかに内湾しながら立ち上がる。器壁は全体的に厚い。外面は口縁部、頭頂部にそれぞれ一重の圈線がめぐり、同部にタコ唐草文、頭頂部に三角形のなかに花文が描かれている。

94は染付磁器の輪花皿である。蛇ノ目凸型高台で、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部までゆるやかに内湾しながら立ち上がる。器壁は全体的に薄い。内面には、松文、山文が描かれておりサビの付着がみられる。

95は染付磁器の皿である。高台は台形型の断面を呈す。豊付は露胎である。高台の側面に一部砂目痕が残る。高台脇から一段凹み線が確認される。高台脇から口縁部まではゆるやかに内湾ぎみに立ち上がる。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、二重の圈線がめぐり、蛇ノ目釉剥ぎ部分にも環状に砂目痕が残り、草文が描かれている。18世紀後半頃の波佐見焼である。

96は染付磁器の皿である。高台は低く、豊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部までゆるやかに立ち上がる。器壁は底部が厚く口縁部にかけて薄くなる。内面見込みには一重の圈線がめぐり草花文が描かれており、全体的に貫入がみられる。口縁部は連弁文であり、焼成時の歪みがみられる。

97は染付磁器の段重である。高台は低く、高台脇から腰部にかけてやや斜めに立ち上がり、腰部にはケズリが施され、砂目が見られる。腰部から口縁部にかけてやや垂直に立ち上がる。口縁部はケズリが施され、全体的に貫入が見られる。外面胴部には牡丹唐草文が描かれている。

98は磁器の紅皿である。高台は低く、高台脇から口縁部までゆるやかに内湾しながら立ち上がる。型押しで成形されており、器壁は全体的に厚い。紅を入れる為の小皿である。

99は磁器の花瓶である。型押し成形で、底部には布目痕がみられる。底部から胴部下位までは逆「く」の字に立ち上がり、胴部下位から頸部下位までは内湾しながら立ち上がる。頸部から口縁部にかけては外反する。また、頸部下位にはS字状の取手が2つ付く。外面胴部上位には不明文様が描かれている。また、口縁部から胴部下位まで面取りを行い、内面頸部にはナデ調整が施されている。

100は磁器の碗である。高台脇からゆるやかに立ち上がり、口縁部でわずかに開く。器壁は全体的に厚い。内底部は重ね焼き時の高台に接した凹みがみられ、凹みや周辺に砂目痕が残る。高台の豊付は露胎しており、砂目痕も残る。

101は青磁の小香炉である。高台は低く、蛇ノ目凸型高台である。高台豊付は釉剥ぎで、高台脇から腰部は外反し、腰部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。口縁部はやや「く」の字に内湾する。外面には胴部中位から高台にかけて貫入がみられる。内面には胴部中位から見込み中央にかけて無釉である。見込みには、焼成時の伏せ焼き痕がみられ、中央には縮緬皺がみられる。

102は青磁の香炉である。高台豊付は蛇ノ目釉剥ぎである。腰部で凹みをつくり口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。器壁は底部が厚く、胴部に向かい薄くなるが、口縁部でまた厚みをもつ。内面上位から外面にかけて施釉が施される。底部には荒い砂目や施釉が環状に残る。製作時にチャツやハマを使用した際のものか？

103は陶器の注口付鉢である。高台は低く、削り出しである。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がり、胴部上位には注口が付く。口縁部は玉縁である。外面胴部には焼成時の付着物がみられ、見込み中央には一筆で円状に描いた文様がみられる。

104は陶器の碗である。高台は高く、高台脇から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上

る。高台内は露胎でそれ以外には施釉されている。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。

105は陶器の油壺利である。高台は削り出しで、高台脇から頸部会にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がる。胴部中位に最大径を計る。頸部はまっすぐに立ち上がり、その上部にはたれ漏れの油を受けるための縁と中に戻すための孔を設ける。また、頸部下位から胴部上位にかけて把手が付く。外面は鉄釉と灰釉、内面は口縁部から頸部上位にかけて鉄釉が施される。

106は陶器の壺である。高台は削り出しで、高台から頸部までやや内湾し、肩部に最大径を計る。肩部から頸部はやや垂直に立ち上がり、口縁部は外反する。高台以外は鉄釉を施す。

107は陶器の灯明皿である。底部は糸切りで、底部から胴部までは外反し、口縁部はやや垂直に立ち上がる。底部から腰部と、口縁部はクロクロ成形後、ヘラ削りを施す。

108は陶器の灯台の受皿である。底部は糸切りで底部から胴部まで外反し、胴部から口縁部にかけて内湾する。内面見込みには、剥離した様な痕跡がみられる。

109は陶器の土瓶である。底部は上げ底である。底部から頸部にかけてソロバン玉型に立ち上がる。胴部中位から上位にかけて、注口1つ、把手2つ付く。底部には小さな円錐状の脚が1ヶ所残る。

110は陶器の土瓶である。底部から頸部付け根までゆるやかに内湾しながら立ち上がる。胴部中位に最大径を計り、注口が付く。胴部上位にはつまみが付く。注口・つまみは後付けである。縁釉を外面、内面の口縁部から胴部下位まで施す。

111は陶器の土瓶である。底部は欠損しており、胴部はソロバン玉形である。胴部中位に最大径を計り、頸部から口縁部にかけてやや斜めに立ち上がる。胴部中位に注口が付く。内面胴部には、注口内の穿孔が3つ、底部外面には足が3足後付けされている。外面は鉄釉が、内面は灰釉が施されている。外面胴部上位には、取っ手が1つ付いているが本来ならば2つ付くものと思われる。

112は陶器の擂鉢である。高台は削り出しで、高台脇から口縁部にかけてやや斜めに立ち上がる。内面には擂臼を施す。

113は京焼風陶器の碗である。高台は低く、高台脇から胴部中位までは内湾し、胴部中位から口縁部にかけてはやや垂直に立ち上がる。高台から胴部下位は露胎であり、壺付きは京焼風陶器の特徴である削り出しを施す。外面にはうさぎ文、草文が描かれている。

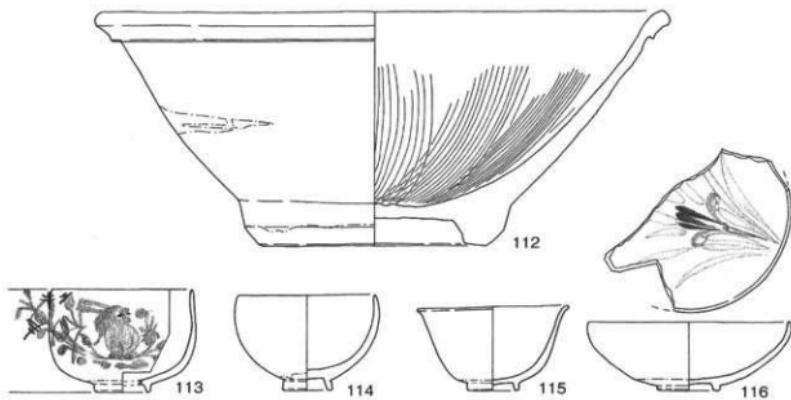
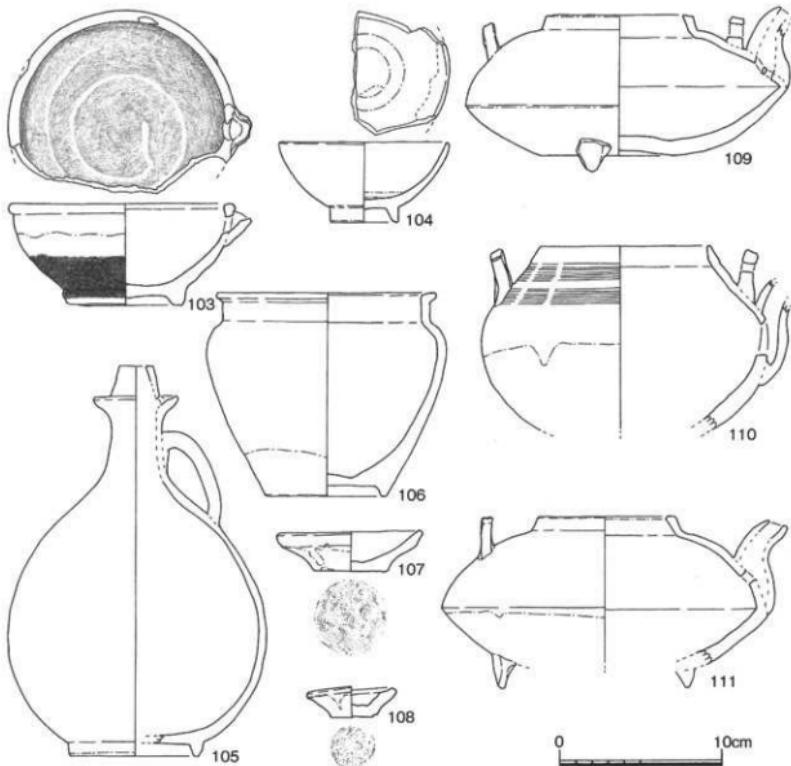
114は京焼風陶器の碗である。高台は低く、削り出しだけである。高台脇から口縁部までゆるやかに内湾しながら立ち上がる。器壁は全体的に厚く口縁部のみ薄い。

115は京焼風陶器の碗である。高台は低く、削りだしである。高台脇から胴部中位までゆるやかに内湾しながら立ち上がり、胴部中位から口縁部にかけて外反する。口縁部は端反型であり、全体的に貫入がみられる。

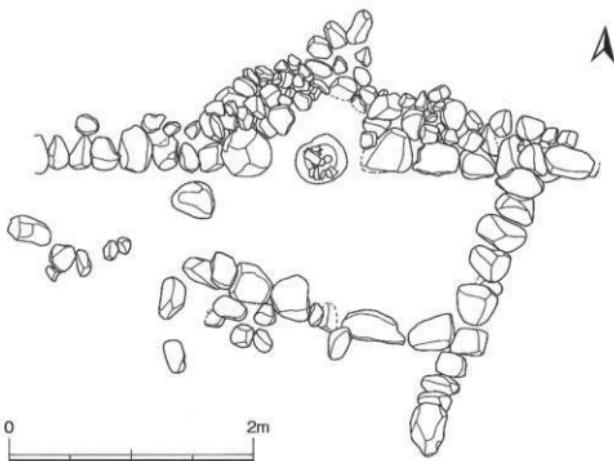
116は京焼風陶器の色絵の皿である。高台は低く、削り出しだけである。高台脇から口縁部まで内湾しながら立ち上がり、高台から胴部下位までは露胎である。内面は色絵で杜若文が描かれている。全体的に貫入がみられる。

## 【参考文献】

- 大橋康二 1994『古伊万里の文様－初期肥前磁器を中心に－』理工学社  
大橋康二・鈴田由紀夫・百田美和 2005『古伊万里の見方シリーズ2成形』佐賀県立九州陶磁文化館  
大橋康二・鈴田由紀夫・宇治章・中村康子・山本文子 2007『古伊万里の見方シリーズ4窯詰め』  
佐賀県立九州陶磁文化館  
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会  
中野雄二 2012『べんざらのひとりごと』長崎県波佐見町教育委員会  
中野雄二 2013『くらわんか藤田コレクション－寄贈記念図録－』長崎県波佐見町教育委員会



第20図 3区土坑（SK-7）出土遺物（陶器）（1/3）



第21図 3区埋壺・石列検出状況（1/40）

#### — 3区埋壺・石列検出状況 —（第21図・第22図）

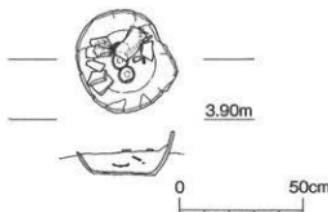
3区SD-1北側からは、埋壺と石列が検出された。土坑群（SK-1～SK-7）が検出された位置よりもやや北西側にあたる。石列は東西方向に直線的に並び1段積みである。石列の裏側からは石列に伴う裏込め石と考えられる拳大の石が約40cm幅で検出された。石列は、一部分石が抜き取られており、その部分には、壺が埋め込まれた状態で検出された。

また、石列から南側へ方形状に張り出すような形で石を並べた遺構が検出された。この遺構は、埋壺を開くように石を並べており、その石材は、石列と同様、全て人頭大の自然石を用いている。方形状に並べられた石の内側には土と拳大の石が大量に堆積していることから、壺を埋める際に同時にに入れ込まれたものと考えられる。

#### — 3区埋壺検出状況 —（第21図・第22図）

3区からは、壺が埋められた状態で検出された。胴部下位から底部にかけて土中に埋められており、胴部中位から口縁部にかけては欠損している。おそらく、後世の開発などにより胴部中位から口縁部にかけては壊された可能性が高い。また、埋壺内には、埋壺の破片と1cmほどの小礫を含む土が入り込んでいた。

埋壺の壺には瓦質土器を用いており、外表面は剥落が激しく、非常にもろい。壺内の底の部分からは、土師皿5点と簪4点が積み重ねられた状態で出土した。



第22図 3区埋壺検出状況（1/20）

- 3 区埋甕内出土遺物 - (第23図)

117は土師皿である。底部は回転糸切りである。底部には「十」の文字が墨書で描かれている。内外面ともにナデで、外面内面の口縁部には煤の付着がみられることから、灯明皿として使用されていた可能性が高い。

118は土師皿である。底部は回転糸切りである。内面口縁部には付着物がみられる。

119は土師皿である。底部は回転糸切りである。内外面ともにナデ調整で、口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されていた可能性が高い。

120は土師皿である。底部は回転糸切りである。内外面ともにナデで、口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されていた可能性が高い。

121は土師皿である。底部は回転糸切り後、ナデである。底部から口縁部までやや斜めに立ち上がる。内外面の口縁部には煤の付着がみられることから、灯明皿として使用されていた可能性が高い。

122は銅製品の簪である。髪に差す部分が二股に分かれ、本来は頭部に耳搔きが付くものである。

123は銅製品の簪である。髪に差す部分が二股に分かれ、本来は頭部に耳搔きが付くものである。

124は銅製品の簪である。簪頭部の耳搔き部分である。神代鍋鳥家の家紋の形に類似している。

125は銅製品の簪である。簪の髪に差す部分の一部である。

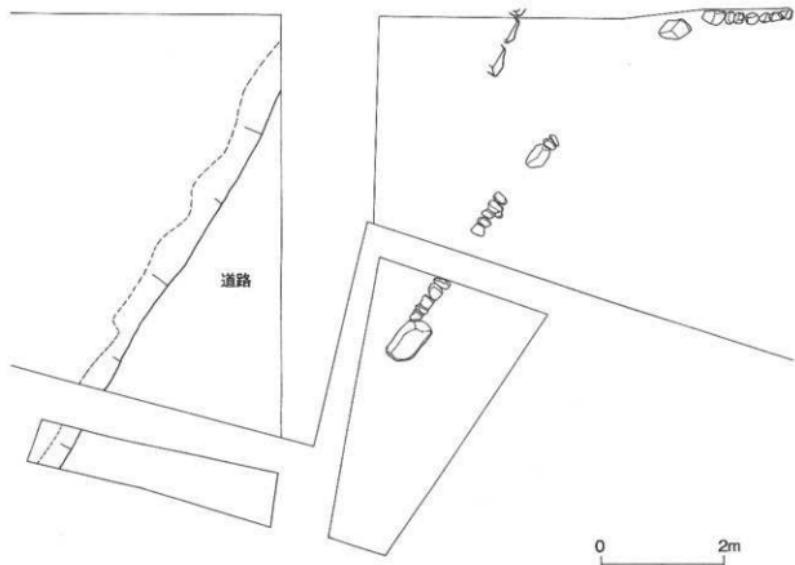
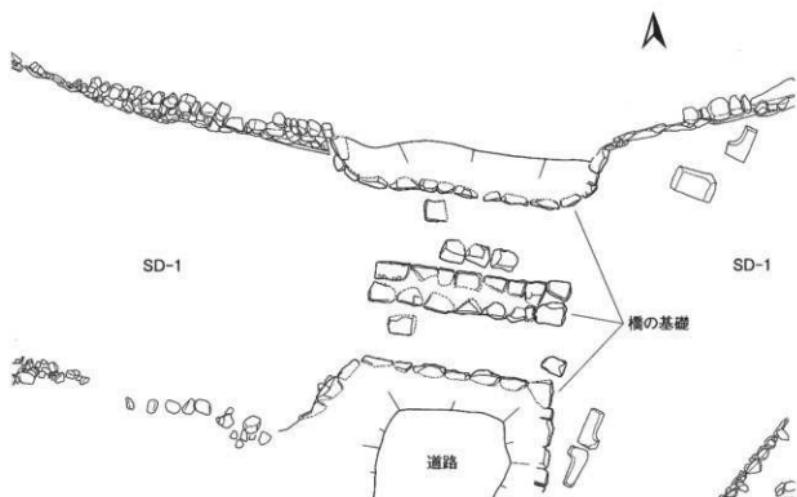
126瓦質土器(埋甕)。底部から胴部中位までやや斜めに立ち上がるが、胴部中位から口縁部にかけて欠損するため、全容は把握できない。外面は、器面の剥落がはげしく、調整痕などは不明である。

内面は胴部下位から底部にかけてハケメ調整が施される。器壁は全体的に厚い。



第23図 3区埋甕内出土遺物(土師器・銅製品)・埋甕(1/3)

検出された構造と遺物



第24図 5区～8区道路・橋（昭和21年頃に架けられたもの）検出状況（1/80）